

現代 GP 科目「Central Japan」

～英語と仕事と地域理解を求めて～

福本明子・太田直子・太田晶子・小沢 茂
Gemma McGoldrick・山田久美子・若山真幸

I. はじめに

2005 年 8 月、本学英語教育の取組「多文化共生を目指した発信型全学英語教育—モジュール化された体系的カリキュラム開発—」が、「仕事で英語が使える日本人の育成部門」において文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に選定された。

小論は、上記選定を受け全学英語教育運営委員会が 2005-2008 年度に実施した、AS MAP (Aichi Shukutoku University Multicultural and Cross-cultural Awareness Program) の中の 1 科目として実施された「Central Japan」についての実施報告と教育効果を検証し、現代 GP 支援終了後の継続可能な語学・キャリア教育の在り方を探ることを目的とする。

II. 「Central Japan」

まず「Central Japan」の AS MAP での位置づけと目的、立ち上げの経緯、講演企業について述べていく。

II-1. AS MAP での位置づけと目的

AS MAP は「基礎力養成モジュール」、「多文化共生理解モジュール」、「発信力養成モジュール」、「学部等固有モジュール」という 4 つのモジュールから構成されていた¹。「Central Japan」は、「多文化共生理解モジュール」のサブモジュールである「地域理解モジュール」の科目の 1 つとして位置づけられた。その科目としての目的は、中部地方の企業について英語で理解・表現できるようになることであった。「地域理解モジュール」には、その他に日本の伝統芸能や伝統文化を知り、それらを英語で理解・表現できるようになることを目標とする「Traditional Arts in Japan」と、日系人・外国語労働者やその家族の問題などを取り上げ、愛知県特有の事情を含め、身近な問題に対するケーススタディを英語で行う「Multiculturalism in Aichi」という 2 科目があり、「Central Japan」を含めた 3 科目によってサブモジュールが構成されていた。いずれも、自身を知ること、自国や地域の歴史・現状を知り、さらにこれらを英語で表現できるようになることを目的としていた。

II-2. 立ち上げの経緯

「Central Japan」を実施するにあたり、全学英語教育運営委員会はその講演企業・講演者の人選・リクルートに最も苦慮した。「地域理解モジュール」は、世界で活躍し実績のある方々を迎えて授業を実施することを基本姿勢としていたこと、本委員会所属の教員はほぼ全てが英語関連科目を専門にする教員であり、中部地方の代表的な企業とのコネクションがなかったことが主な原因である。更に、大学の中で呼びかけ、企業との太い繋がりを持つ教員や組織と連携をとるという方法もあったが、選定からプログラム実施への期間が短かったことや、大学における本プログラムの知名度が低かったこともあり、大学内のネットワークや資源を十分に活用できなかった。このことは最も大きな反省点でもある。

手探りながら、本委員会の教員や関係する事務スタッフの友人や同窓に個別に依頼を重ね、株式会社ミツカンに講義を依頼することができたのが、2005年の秋であった。その後も伝を辿り、会社訪問を繰り返し、本プログラムの趣旨を話し一つ一つ賛同を得ることができた。次第に本プログラムの趣旨を理解してくださった企業が、他の企業の担当者へと熱心に働きかけてくださり、一気に半期の授業回数を上回る企業から賛同を得ることができ、2006年度からの授業科目としての「Central Japan」が完成したのである。

「Central Japan」の授業実施までの調整の経過を考えると、本科目が数々の方々のご理解とご厚意によって成り立っていたことを今更ながら実感するのである。その強い熱意に支えられ「Central Japan」は、その授業方法に何度も改良を加え、学生にとって有意義な科目へと展開することができたと考える。

II-3. 講演企業・講演者と講演内容

講演企業は、中部地方でビジネス展開を行っている企業から英語で部分的²にでもお話しただけの講演者を招いた。2005-2008年の3年間の授業で講演をしていただいた企業は延べ73社、講演者は延べ75人となった。前期・後期の両学期に3年に渡り講演を行っていただいた企業がほとんどであったが、数社・数名はどちらか一方の学期や単年の実施であった。各年度・学期の講演企業・講演者の名称は、各年の「自己点検報告書」(全学英語教育運営委員会、2007, 2008, 2009)に掲載されている³。講演者の急なキャンセルは僅かで(学期開始後は3年間で1件のみ)、学期の開始前の調整で講義の予定を組むことができた。他の業種との兼ね合いや、講演者のスケジュール調整の都合で、1企業のみ東京の会社が含まれていたが、「英語で仕事を行うこと」を中心に講演をされ、受講学生には毎学期評判がよかったので、継続して講演を依頼した。

講演内容は、講演企業・講演者により多様であった。講演の依頼時に科目の趣旨を「中部地方の企業の理解」と説明してあったが、講演者の裁量で、企業の広報戦略、中部地方経済の日本での位置づけ、ライフヒストリー、人生哲学、英語と仕事、情報の活用、コンピュータの歴

史、通訳の仕事、女性のキャリア、国際舞台で活躍する資質、観光産業、接客サービス、など多岐にわたる内容が盛り込まれた。各講演内容の詳細は、2006 年度の講演者のみではあるが「2006 年度自己点検報告書」（全学英語教育運営委員会、2007）に記載されている。

Ⅲ. 授 業

本科目における、授業の目的と狙い、その理論的裏付け、受講対象・受講学生、担当教員（コーディネーター）、授業計画・課題と成績評価、Blackboard の活用、について順次説明する。

Ⅲ-1. 授業の目的と狙い

本科目は、その主たる目的を「日本および中部地方の歴史・現状を英語で学び、表現することを目指す」としていた。具体的には以下の 2 点が目的として挙げられる。

- 1) 実社会における企業の役割、また厳しい現実などを理解し、より広い視野を育てること。
- 2) 授業内容を理解し、それを自分の言葉でまとめ、表現できるようになること。

1)、2) の目的は、毎年当校の学生全員に配布される「履修要覧」に掲載し、更に毎学期の初めに受講学生に配布する詳細な授業計画や課題を示した「シラバス」にも記載し、学生への周知を図った。

1) の「理解・視野」に関する目的は主に、前述した講演者の講演内容や後述する課題レポートを通じて学生が自主的に学ぶことを狙い、また、2) の「表現」に関する目的は、課題レポートや講演後の質疑応答などを通じて達成することを狙った。

Ⅲ-2. 目的・狙いへの理論的裏付け

本科目の授業内容や課題の設定に関して、外国語教育の動機づけと非英語母語話者の英語発音への姿勢、の 2 点がある。

外国語教育の動機づけ

まず外国語教育の動機づけに関して、ドルニエイの「過程志向アプローチ」を参考にした。ドルニエイ（2005）は、動機づけの研究を多岐に概観し個人のコミットメントが長期に必要な語学学習には、動機づけにも学習の過程（行動前、行動中、行動後）に応じた指導の働きかけや刺激が必要であるとしている。即ち、1) 選択動機づけ（Choice Motivation）、2) 実行動機づけ（Executive Motivation）、3) 動機づけを高める追感（Motivational Retrospection）には異なる働きかけが必要であるとしている（ドルニエイ、2005）。具体的には、1) 選択動機づけは、学習をするという行動を形成する学習開始時の動機づけであり、学習者に深く関連する教材や目標を提示し、学習への好ましい価値観の提示が必要であるとしている。2) 実行動機づけ

けは、学習途中に学習という行動を続けるための動機づけであり、学習を楽しめるように工夫し、タスクの提示が必要であり、学習者の自尊感情を大切にする事などが提言されている。また3) 動機づけを高める迫感、ある学習の終了で区切りとなる時には、学習を振返る機会を設け、学習者の満足感を高め、その後の学習につなげる必要性を提示している。

「Central Japan」においては、上記1) - 3) のそれぞれの段階で学生の動機づけを高める要素や働きかけを盛り込んだ。1) の学習の開始時には、本科目の開講自体が強い動機づけとなっている。限られた調査対象ではあるが、加賀田・小磯・前田(2007)は、トピックとして異文化交流やキャリア設計が、大学生の英語学習において強い動機づけの要因になっていると報告している。実際、「Central Japan」でも数年後に開始する就職活動を意識した学生の登録が多くうかがえた。2) 学習途中に対する動機づけとして、講演企業が毎回変わること各回の授業への期待・関心を高める効果があった。授業開始前の事前レポートの取組は配点を高くし、動機づけの高いタスクとした。質疑応答は、「講演後の行動として英語圏では当たり前のルールや礼儀である」とシラバスや初回の授業で説明し、巡回しながらコーディネーターが受講学生の英語での質問の表現を援助し、タスクの達成を目指した。また、学んだ事を記載する授業後のレポートが、成績の一部であることや講演者へのフィードバックになることから、受講学生は授業の内容に集中せざるをえなかった。また、3) 終了時(区切り)として、学期中に学んだ事柄を学期末に再確認させ、最終レポートとしてまとめ提出させた。英語でのレポートを日本語でのレポートより高く評価するとし⁴、英語で自らの学びを表現することが望ましいタスクであることを提示した。

非英語母語話者の英語発音への評価

非英語母語話者の英語の発音が、仕事をするにあたり機能することを実感させることは、英語を学習する上で考慮すべき点であり、授業の狙いを含む必要があると考えた。英語を母国語とする人口は約3.7億人で、中国語母語話者の人口には遥かに及ばず、世界で2位であるが、第二外国語や公用語としての英語話者人口は約15億人で、母語話者を含まない話者人口は世界で1位である(文字情報データ集: Mojio Net, 2009)。このような世界の英語話者人口の状況下で、自らの英語の発音についてどのような評価を持つのか国により分かれている。山田(2005)は、シンガポールとインドにおける英語のアクセント・発音の特徴に対する姿勢が正反対であることを例示している。シンガポールでは、自らの英語をシングリッシュとし、文法や発音を正しくなく矯正すべき対象としてとらえているが、インドでは逆に自分達の英語は自国独特の歴史や文化に基づき誇りやアイデンティティの源泉であり、矯正すべきものではなくむしろ世界に対して広めるべきものであると考えているという(山田、2005)。池谷(2008)は、通じる努力はすべきではあるが、日本人は発音に神経質になりすぎず、カタカナ英語をふまえた発音で十分通じるので工夫をすれば良いと提案している。Macintyre and Charos (1996)によると、第二外国語修得において情緒的な不安感(anxiety)はコミュニケーションの意欲や動機づけを低下させるという指摘もある。よって、非英語母語話者の発音が仕事の現場で機能し

ているということを学生には実感させ、コミュニケーションの意欲を高めることは重要な観点であると考えた。

よって、「Central Japan」では、講演者には英語を必ず用いて講演を行うことを依頼した。ただし、本科目は習熟度別のクラス編成ではないため、学生の理解の度合いを図りながら英語の分量や使用する単語の難易度を講演者に調整してもらった。ある講演者は英語が母語や公用語であった。また、ある講演者は高等教育（院・学部）を英語圏の大学で受けられていた。そして残りの講演者は、英語を日本で学習され、仕事で英語圏・非英語圏に赴任され仕事で英語を使ってこられた。英語の流暢さや、プレゼンテーションスキルの多様さを目の当たりにしながら、受講学生は仕事で英語を使うことは何なのかを考える機会となった。

Ⅲ-3. 受講対象・受講学生

「Central Japan」は半期・2単位の科目として開講された。全学部の学生に対して平等に履修の機会を保証するために、長久手キャンパスと星が丘キャンパスとを半期ごとに場所を変えて、年に前期・後期の2回実施した。

受講対象は、習熟度別クラス編成はおこなわないにしても、英語で企業活動を理解する必要があるため、本校全学科の2年生以上の学生を対象とした。ただし、1年生の前期に英語コミュニケーション科目を4単位（2科目）以上取得していれば1年生の後期からでも受講することを可能とした。2006-2008年の3年間、両キャンパスでの受講学生数は表1のとおりで、延べ388人の学生が受講した。

表1：受講学生数

	長久手キャンパス	星が丘キャンパス
2006年度	61人	59人
2007年度	91人	45人
2008年度	70人	62人

Ⅲ-4. 担当教員（コーディネーター）

毎学期3-4名の全学英語教育運営委員会の教員が担当教員（コーディネーター）として学生とともに授業に参加した。コーディネーターの役割は大きく二つあった。一つ目は、講演者が講演に集中できるように、司会進行、講演者の紹介、OA機器の操作、資料配布などの講演者の補助作業を授業中に行った。二つ目に、Ⅲ-1の授業の目的と狙いを達成するために、出席管理、質疑応答の奨励や英語表現の補助、資料の手配、課題の提示・回収、アンケートの回収などを授業中や終了後に行った。

Ⅲ-5. 授業計画・課題と成績評価

2006年度から2008年度にかけて、課題の内容や詳細は毎学期・毎年の反省をふまえて授業改善を行ったため、各学期・年度ごとに多少の違いはあるが、おおよその学期中の授業計画、課題、成績評価を以下に記載する。参考までに、本科目の最終学期となった2008年度後期のシラバスを資料1として添付した。

各学期15回の授業計画は、1回目を授業オリエンテーションに充て、本科目の目的、授業内容、課題と評価、後述するBlackboardの利用方法、などについて説明した。2回目から14回目の授業の中で、毎回1企業ずつ講演者を招き、企業の事業内容や理念・講演者自身の海外経験などを中心に90分の講演のうち、少なくとも3分の1以上を英語で話していただいた。授業終了前10-20分程度を質疑応答の時間とし、講演内容や企業活動について学生から質問をつのった。15回目の授業では、授業に関するアンケートを実施したり、最終レポートの提出機会とした。学期開始前後に講演者のスケジュールで講演がキャンセルになったり、代替の講演者の手配が出来なかった週には、コーディネーターがこれまでの講演内容に即した問題を作成して内容理解の確認をしたり、課題の提出状況や内容的なコメントを実施したり、授業運営に必要な指導を行った。

課題として、1) 事前レポート、2) 授業後レポート、および3) 最終レポートの3つを受講学生に課した。

1) 事前レポートでは、授業開始までに講演予定の各企業についてホームページや関連記事を検索し、基礎知識を得たうえで講演を聞くことを狙いとした。成績評価比率の30%を配点し、学生にもその重要性を提示し、講演内容の理解を助け、質問をする上でも必要な前準備を奨励した。2006年度の科目開始当初は、各企業のホームページから業務内容などを調べるように指示をだすと、ホームページからのコピーが目立った。数回注意を喚起してもあまり改善が見られなかったことから、2007年度後期よりコーディネーターが事前に講演企業や業界に関する設問を5つ前後用意し、ホームページ等で調べて解答させる形式にした。講演企業が固定されてくると講演内容が想定でき、事前レポートの設問にも反映させることができた。

2) 授業後レポートは、講演後1週間以内に講演で学んだ内容や感想、自分の意見を自由に記述してもらった。課題の名称が2007年度後期より「レポート」から「アンケート」へと変更になった理由は、講演者が自身の講演改善のため受講学生の反応や意見を求めてくる場合が増えたことにより、「レポート」として学生に課すより、「アンケート」として課した方が、受講学生からの提出物の適正な利用となるためである。結果的には、受講学生には感想がそのまま講演者に伝えられると意識させ、文体にも注意を喚起するという効果があった。また、名称が「アンケート」であっても、コーディネーターは受講学生の学びは読み取れるので、課題の目的を達成できた。本課題には、成績評価比率の10%を配点した。

3) 最終レポートは、学期末に一度、学期中の講演のなかで一番興味がかった企業や学期を通じて学んだ内容について、日本語であれば1200字以上、または英語であれば600語以上にま

とめて提出する課題である。単に講演内容をまとめるのではなく、学んだことをもとに発展的に考え、自分の言葉での意見や感想を表現することを重視した。成績評価比率の 30%を配点した。

更に成績評価には、上記レポート課題 1)～ 3)に加えて、出席・授業への参加態度が含まれる。聴講のマナーとして、毎回の出席や静聴を学生には求めた。業務時間を割き忙しいスケジュールを調整して講演をおこなっていただく講演者への礼儀やその重要性を伝えるため、成績評価比率の 30%を配点した。また、講演に対して質問することは英語圏においては講演者に対する礼儀であることや、意見を自分の言葉でまとめて表現できる訓練の一環として、質問を行うことを授業への参加態度として評価した。具体的には「質問カード」を用意し、講義内容を踏まえて全員が毎回英語で質問を記入し、授業終了後回収し出席・授業への参加態度の評価に反映させた。

III-6. Blackboard の活用

2007 年度後期より、インターネットを利用した学習管理システムである Blackboard を本科目においてでも利用を始めた。利用開始当初の主な目的は、課題の回収と資料の配布・提示に関してであったが、講演者へのフィードバックや報告書作成のためのアンケートの回収にも利便性があった。

Blackboard の利用で課題の回収や学生対応の負荷が軽減された。Blackboard の開始前には、事前レポートや授業後レポートを課題として毎回各企業に関して課していた。コーディネーター別に回収しようとする、どうしても授業開始が数分だが遅れることになっていた。また課題へのフィードバックや補足的な説明をコーディネーターが行うと更に数分を要していた。Blackboard への課題の提出やコメントの掲載は、講演や質疑応答の時間を可能な限り確保することに役立った。更に、企業ごとにスレッドを立ち上げてあるため、提出遅れの課題も紛れることがなく、コーディネーターにとって課題管理が容易になった。

資料の配布・提示に関しては、Blackboard の利用で、時間的余裕ができた。利用前は、資料を利用する 1 週間前には学生に配布する必要がある、本業で忙しい講演者に依頼するにはこちらにも遠慮があったし、急な配布の依頼には対応ができなかった。また欠席者に対する配布の対応も事務スタッフの手を煩わせていた。しかし Blackboard を利用してからは、受講学生に連絡事項を定期的に確認することを指示し、講演数日前の資料配布の依頼にも対応でき、関連情報があればコーディネーターが随時掲載できた。

追加の効果としては、企業へのフィードバックが容易になった。講演者から講演内容について学生からのフィードバックを求められても、Blackboard 活用前であれば、講演の翌週にアンケートを配布して回収し、コーディネーターが学生からのコメントをまとめ、講演者に届けていた。時間も手間もかかり講演者にとっても依頼し辛く、またコーディネーターにとっても負荷が大きかった。しかし Blackboard の活用後は、アンケート作成機能を利用し、1 週間以内

に学生からの声を回収することができ、自由回答の欄を設けておけば、学生の率直な声をそのまま届けることができた。コーディネーターは書式や若干の学生の言葉づかいを修正するだけで、講演者の要望には迅速に答えることができた。

また、本科目に関するアンケートが学期末に回収しやすくなった。最終レポートと同様の期限内で授業に関するアンケートへの回答を学生に求めた。アンケート作成機能を用いると、設問ごとの集計や平均値まで出てくるので、各年度末の報告書作成が容易になった。

IV. 学生の声と授業の効果

最終レポートの提出と同時期に、本科目全体に関するアンケートも2007年度より実施してきた。そのアンケートの数値と自由記述より、受講学生の本科目からの学びと授業の効果をまとめる。

IV-1. 数値から

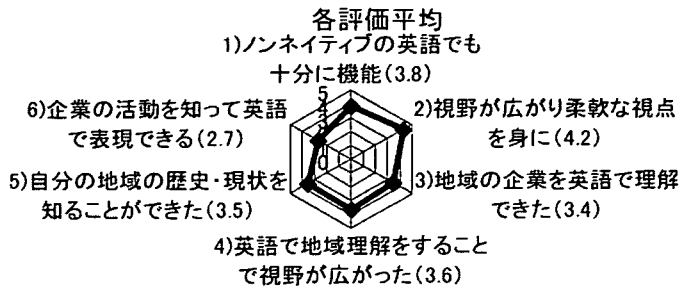
まずは、アンケートの数値から受講学生の学びや授業の効果を見てみる。特にⅢ-1、Ⅲ-2の授業の目的に関しての達成度を概観する。アンケートの質問事項は以下1)～6)の6点であった。

- 1) ノンネイティブの英語でも十分に機能することを実感できたかどうか。
- 2) 視野が広がり柔軟な視点を身につけることができたかどうか。
- 3) 地域の企業を英語で理解できたかどうか。
- 4) 英語で地域を理解することで視野が広がったかどうか。
- 5) 自分の地域の歴史・現状を知ることができたかどうか。
- 6) 企業の活動を知って英語で表現できるようになったかどうか。

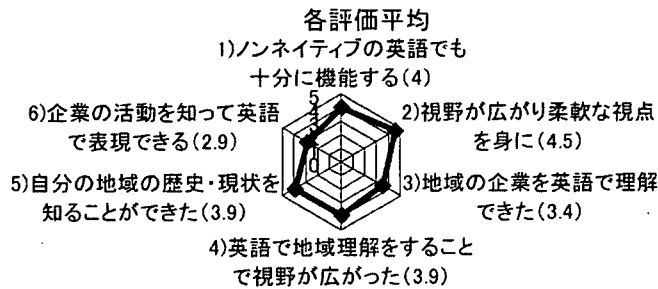
これらの項目に対し、「5」を「強く同意する」、「1」を「全く同意しない」とし、1-5の5段階で受講学生からの評価を求めた。グラフ1-4(次ページに掲載)は、その結果を2年間にわたり学期(開講キャンパス)別にまとめたものである。

グラフ1-4に共通する点は、「視野や知識の広がり(質問事項2)4)5)」に関する評価が相対的に高く(平均3.5-4.5)、次いで「ノンネイティブの英語への評価(質問事項1)」が高かった(平均3.8-4)。その一方で、「学生自身の英語での理解や表現(質問事項3)6)」に関する評価が相対的に低かった(平均2.7-3.4)。また、長久手キャンパス(グラフ1、3)と星が丘キャンパス(グラフ2、4)では、星が丘キャンパスの学生の方が質問事項3)を除き、0.2ポイントずつ各評価の平均が高かった。

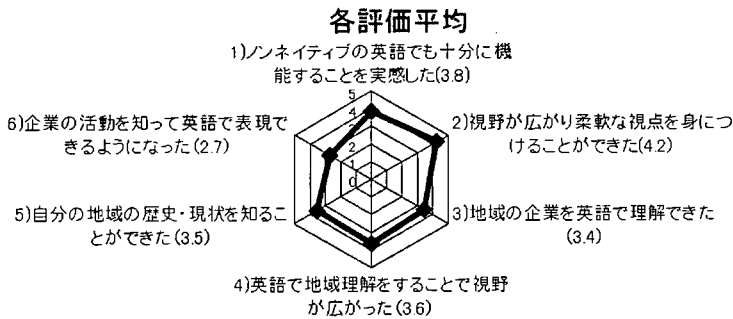
本科目の目的に照らし合わせて考察すると、Ⅲ-1に記載の目的1)「知識・理解の促進」に関しては、ある程度は達成できたと考えられる。事前レポートで自ら調べ、その後講演を聞くことにより、中部地方の企業の活動について理解が深まり、視野が広がったという自己評価につ



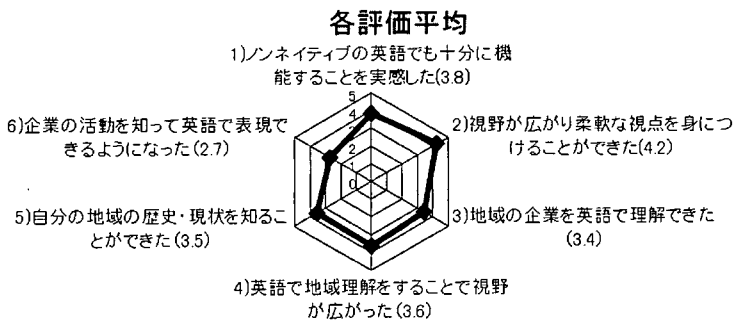
グラフ 1 : 2007 年度・前期 (長久手キャンパス)



グラフ 2 : 2007 年度・後期 (星が丘キャンパス)



グラフ 3 : 2008 年度・前期 (長久手キャンパス)



グラフ 4 : 2008 年度・後期 (星が丘キャンパス)

なだった。ただし、質問事項3)「英語での理解」の評価が低いこともあり、英語での講演部分に関しては理解ができたとは言い難いのも事実である。またⅢ-1に記載の目的2)「英語での表現」に関しては、本科目のみで達成できるものではなく、他の語学の授業と連携して継続的な授業としての働きかけと学生自身の努力が必要である。質問事項6)「英語で表現できる」の受講学生からの評価は一番平均点が低く(平均2.7-2.91)、自己評価の一番高い質問事項2)「視野の広がり・柔軟な視点」(平均4.2-4.5)と比べても平均点で差がみられる。聞き・読み・理解することに比べ自らの意見をまとめ表現することは受講学生にはハードルが高く、そこに英語という要素が加わると受講学生の自己評価は一段と下がるのである。

また、キャンパス間で平均に差が出たことには、英語専攻の学生の割合の差であることが考えられる。2007年度の受講学生の英語専攻の学部・学科を、長久手キャンパスでは英文科・言語コミュニケーション学科⁵とし、星が丘キャンパスでは文化創造学部の多元専攻とすると、それぞれの全受講学生に占める割合は、長久手キャンパスで74%で、星が丘キャンパスで100%である。英語学習の頻度の高さや能力に加えて、英語への自信が、英語を専攻とする学生にはそうでない学生より高く、「理解・表現」のスコアに差が出たと考えられる。

Ⅳ-2. 自由記述から

次に、アンケートの自由記述から受講学生の学びや授業の効果を見てみる。特にⅣ-1で達成度が低かった「英語での理解」と「発信すること」や、授業の目的やⅣ-1での質問事項以外で学生が印象深く学んだことに関して取り上げてみる。コメント中の固有名詞は匿名にしてある。

英語での理解について

Ⅳ-1で「英語での理解」の評価自体は相対的に低かったが、自由記述のコメントでは今後の学習への動機づけになっていることが判る。

英語でただ会話ができるだけでは、就職してから困ると思った。専門用語など職種によって覚えなければいけないことがたくさんあると思った。

自分が本当に英語力がないことに気がつきました。そのことで、本当に英語の勉強をがんばろうと思いました。

英語以外にもやはり必要だということがわかりました。それに加えちゃんとした日本語を話たり、書いたりしなければいけないとつくづく思いました。

日本人が英語で伝えることはやはり難しいことだと思いました。それを理解するのもとても難しかったです。でもどの企業の方も自分の会社に対して高い意識を持っていて、自信に満ち溢れていることがよくわかりました。自分が就職したときには高い意識を持ち、仕事をすることで成功

を遂げたいと思いました。

これらの受講学生のコメントより、学習への動機づけが英語学習のみならず、専門知識・用語の学習、日本語も含めた他の言語の学習と幅が広がっていることがうかがえる。「理解出来ないが、難しいけれど、がんばろう」という終了時(区切り)の動機づけとしては、今後の学習へつなげる効果が明確である。

「伝えること」・「発信すること」について

「発信すること」と関連して「伝えること」というのが受講学生の間で上がってきたテーマであった。学期末に、授業に関するアンケートとして、外部には公表しない形で印象に残った企業・講演者を学生に回答してもらっている(複数回答あり)。その回答の上位に常に上がってくる講演者に関して、「伝えること」について学生がコメントをすることが多かった。

〇〇の特集を見て、プロデューサーさんの「視聴者に何を伝えたいのか」を生で聞くことができてすごくうれしかったです。今は情報番組を見るときに「何を伝えたくて何のために流しているのか」を考えながら見るようになりました。

日本人は英語に対して劣等感を抱きがちで、英語を話す事に対して自信が持てないと聞いた事がある。しかし、だからといって、英語から逃げてはいけなかった。大切なのは、自分なりの“Japanese English”でも良いので、とにかく話す・使う事だと学んだ。英語も日本語と同様、「言語」であり、人とコミュニケーションをとる為のツールである。せっかく、世界の人々と会話する事の出来るツールを持っているのに、それを活用しないのはとてももったいないと感じた。今後私は、自分の英語を恥じる事なく、むしろ自信を持って使っていきたい。そして、英語を通して世界の様々な国の人々と交流し、視野を広げていきたい。

私は海外で活躍する日本人は、英語を母語と同じように流暢に話す人だと思っていた。しかし、日本語英語を気にすることよりも、企業を代表しているんだと自信を持って取組むことが大切だと思った。

講演者の熱意が伝わってきたものは印象深かったです。英語でも、日本語でも気持ちのこもった話は印象に残りました。また今まで興味がなかった分野の企業のお話でも、講演者の伝え方次第でとても興味深いものとなりました。

メッセージには想いがあり汲取ることの重要性、英語はツールであるので発音に引け目を感じずに発話することの重要性、発話の後ろに責任や自負心を持つことの重要性、熱意の重要性など、伝えることの重要性や伝える時に気をつけるべきことを受講学生は学んでいる。

また、毎回の授業で「質問が講演者に対しての礼儀である」と提示し、質問を行うことを「Central Japan」を実施した3年間奨励し続けてきたが、学生が自主的に質問を行うことは少なかった。ただ、その重要性は伝わったことが以下の学生のコメントからうかがえる。

ただ講義を聴くだけでなく、講義を行ってくれた方に対してフィードバックをすることが必要であり、それが礼儀であることを学んだ。これまでそういう機会が少なく、その大切さを知らなかったものでこれからは実践していきたいと思う。

最後に設けられた質問の時間にも手を挙げる生徒は数名しかいませんでした。しかし、急にしっかりとした意見を持ち、発言力をつけろと言われても無理な話です。……人に何か伝えるという点に関しては、やはり自分の思いは伝えなければ伝わらないものだと思うので、少しでも改善していけるとよいと思います。

授業終了時の今後の課題や目標として、質問を行うことや自分の思いを伝えることを挙げているので、今後の学習の動機づけになっていることがうかがえる。

講演者やその人生について

講演者は、企業の活動内容を説明するのみでなく、人生において・仕事をしていく上で自らが大切だと思うことを講演内容にもりこまれていたことが多かった。そのことを学生はどのように受け止めていたのかが、以下の学生のコメントよりうかがえる。

一番印象的な講義は〇〇会社の講義だった。授業で、私がいつも自分の選択に対して迷っていた人間なので、“Do you think that you have done something wrong or maybe wrong?”という質問を聞いた。後悔したことは誰でもあると思っていた私は、□□さんの答えに本当に驚いた。自分を信じているので、間違った選択はないのだ。その反面、私は人生を振り返る時、時々間違ったかなと迷っていた。それは自分に信じていないからかもしれない。□□さんからもらった“Believe in yourself and just enjoy your wonderful life!”という意見を覚えて、これからも自分らしく夢に真っ直ぐ進んでいこうと思った。本当に人生の勉強になった。

充実した人生は自分を磨き、自分の価値を高める事を学びました。この講義に來た講師の方は、人生を充実して過している方が多く、皆、輝いていました。彼らは、仕事を人生の一部であると考えており、常に好奇心や探究心を持って仕事にぶつかっていて、仕事に対して誇りを持っていました。さらに、彼らは現状に甘んじることなく、常に目の前に目標を定め、その目標を達成するために、努力されていました。そのような彼らの姿勢に、圧倒されました。私も彼らのように、常に目標に向かって努力し、自分を磨いて、充実した生活を送ろうと思いました。

株式会社〇〇、□□会社、△△会社の三人には共通点があると思います。堂々としている。私達生徒の聞くときの姿勢、目線、反応にとっても敏感。厳しいことという。この一授業をどれだけ私達と楽しく過ごそうかを考えながら講演をしている。人生を楽しんでいる。このような点をとても感じた。そのおかげで楽しくて、ためになるお話がたくさん聞けました。

働くとはなにかということを学んだ。自分が考えていたよりももっと厳しいものだったと思った。し

かし、逆に、自分が思っていた以上に、仕事をするということは喜びや充実感を与えてくれるものなんだとも思った。

いろんな仕事があって視野が広がりました。企業のことも知るのももちろんいいし、なによりもプレゼンターが経験してきた経験談を聞いたのがよかった。一人一人ストーリーがあってとても勉強になったし、将来自分がその年くらいになったときにもっともっといい経験をして、後輩に自分の経験を話せるくらい立派な大人になりたいと思います。

人生において自分を信じること、目標のために努力することが充実した人生には必要であること、人を対等に扱うことと人生を楽しむことが魅力につながることで、仕事の意味、人生の目標、などが学びとして受け止められている。これらのコメントはほんの一部であるが、受講学生が企業活動の講演を聞きながら、より広く人生についての示唆を得ていることがうかがえる例である。

また「Central Japan」実施の3年の間に、継続して講演を引き受けてくださったある講演者の本社が、世界的な事業整理の一環で講演者の統括されていた研究所を閉鎖した。本社の閉鎖の決定を受け、講演者がどのような決断をし、研究所員に働き掛け、新会社を立ち上げたのかについて新聞報道があったので、事前レポートの資料として用いた。講演者も講演の中で起業の話をしてくださり、企業環境の厳しさと同時に可能性をまざまざと学べた学期があった。その学期、この講演者は一番印象深かったと受講学生から支持をうけた。

そしてなにより〇〇さんの仕事への情熱をものすごく感じました。自分の経験や信頼されることと信用することの関係や大切さがとても勉強になり、ものすごく伝わってきたので特に印象深い講義でした。

講演者の方の「覚悟する」という言葉がとても印象に残っているからです。未来のことがわからない不安もあるし、これからますます厳しい社会になっていくけれど、それも覚悟して自分のできることをやっていかなければいけないと思いました。工場の閉鎖、新会社を立ち上げるなどをやってこられた方なので、とても心に響く言葉でした。

またこの講演者は、自らの体験を講演で語るのみでなく、授業後にも受講学生の質問に答える形で自らの体験を共有してくださった。授業開始前のコーディネーターとの雑談で、授業開始前の課題として受講学生が新聞記事を読み講演者に対して質問を考えてきたと伝えると、これらの質問に対しても回答をしたいと言ってくださり、質問のリストを送付すると、忙しい中時間を割いて回答してくださった。そのリストはBlackboardに掲載し、講演当日の欠席学生も閲覧することができ、受講学生には貴重な体験と情報となった。

このように、IVでは受講学生のアンケート(数値・自由記述)から、学習効果を動機づけと非英語母語話者の英語発音という観点から設定した本科目の効果を検証した。動機づけの過程

(学習途中、終了時)に関しても英語学習への意欲がうかがえた。更に、生き方、伝えること・発信すること、就職、企業についてなど多岐にわたり学んだことがうかがえ、本科目「Central Japan」の狙いは達成でき、学習効果も高かったといえる。

V. GP 終了後にも継続可能な語学教育とキャリア教育の在り方

本科目「Central Japan」は、現代 GP 支援期間中は、全学部の学生に対して実施されていたが、現代 GP 支援期間終了後は、2010 年度以降に文学部英文科で、2011 年度以降には 2010 年度に新設の交流文化学部で、クォーター科目 (7.5 週間、1 単位) として実施される予定である。

支援終了時にどのような形で本科目を継続させていくのか、全学英語運営委員会で話し合った。引き続き全学の科目としてこれまでと同じ規模で当委員会が継続実施するには費用・人材の観点から難しいこと、全学部の学生を対象にしているキャリアセンターに引き受けを依頼すると英語での講演実施が不可能でないかということ、などから英語を専門とする学部・学科にて規模を縮小して継続依頼をすることとなった。規模の縮小は、仕方がないが、大変残念である。

ただ、本研究からわかるように、受講学生は英語について学んでいるが、それ以上のことも「Central Japan」を通じて学んでいた。「英語は重要だけど、英語だけではまわらない、だけど英語を学ぶ必要がある」というように複雑だが多様な内容を各自が受け取り学んでいる。中部地方の知識や企業活動を理解し、講演者の選択や哲学を人生の学びとすることを狙いとするのであれば、日本語に限定された講演でも伝えることや発信することの重要性を学生は学べると考えられる。本科目は語学を専門とする学生に語学とキャリアについて考え学ぶ貴重な機会でもあるので、英語の講演を実施する授業を残しつつ、外国語教育センターとキャリアセンターとが連携をとり日本語のみの講演を実施する別の授業科目があってもよいのではないだろうか。そうすることで日本語も含めた語学やその運用について考え、そして多様な視点・知識を得、自らのキャリアに活かせる学びを得る機会を、より多くの本校の学生に提供できるのではないかということを、本研究をふまえたささやかな提言としたい。

VI. おわりに

最後に、多忙な中時間を割き本学で講演をしてくださった講演者の方々、講演者を紹介してくださったの方々、これまで本科目や AS MAP 全体の運営を支えてくださった本学職員の宮野恵さん、内藤昌恵さん、鹿乗牧子さん、プログラムスタッフの木幡智子さん、勝りりこさん、東出ゆかみさん、そして外国語教育センターのスタッフに、この場を借りて感謝の意を表したい。多くの方々の支えにより「Central Japan」は成立し、受講学生にとり語学の授業という枠組みを超えて広く人生や生き方について学ぶ機会となった。コーディネーター教員一同、ここに心より感謝する。

参考・引用資料

- 池谷雄二 (2008)「カタカナ英語：工夫して『通じる発音』に」朝日新聞 朝刊 3月8日 16頁
- 加賀田哲也・小磯かをる・前田和彦 (2007)「英語学習についての調査研究：大学生を対象に」大阪商業大学論集 第2巻 第4号 13-32頁 http://ouc.daishodai.ac.jp/profile/outline/shokei/pdf/144_02.pdf よりダウンロード (2009年6月20日)
- 全学英語教育運営委員会 (2006)「2005年度自己点検報告書(文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 選定プロジェクト、多文化共生を目指した発信型全学英語教育・モジュール化された体系的カリキュラム開発)」愛知淑徳大学
- 全学英語教育運営委員会 (2007)「2006年度自己点検報告書(文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 選定プロジェクト、多文化共生を目指した発信型全学英語教育・モジュール化された体系的カリキュラム開発)」愛知淑徳大学
- 全学英語教育運営委員会 (2008)「2007年度自己点検報告書(文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 選定プロジェクト、多文化共生を目指した発信型全学英語教育・モジュール化された体系的カリキュラム開発)」愛知淑徳大学
- 全学英語教育運営委員会 (2009)「2008年度自己点検報告書(文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 選定プロジェクト、多文化共生を目指した発信型全学英語教育・モジュール化された体系的カリキュラム開発)」愛知淑徳大学
- ドルニエイ ゾルタン (2005)「動機づけを高める英語指導ストラテジー 35」(米山・関、翻訳) 大修館書店
- 文字情報データ集：Mojio Net (2009)「言語 100 人地球村」<http://www.mojix.net/mojio/data.html> よりダウンロード (2009年10月7日)。
- 山田雄一郎 (2005)「英語教育はなぜ間違うのか」ちくま新書
- Macintyre, P. D. & Charos, C. (1996). Personality, Attitudes, and Affect as Predictors of Second Language Communication. *Journal of Language and Social Psychology*. 15, 3-26.

注

- 1 AS MAP の全体像は、自己点検報告書(全学英語教育運営委員会、2007, 2008, 2009)を参照のこと。
- 2 もともとは講義の3分の1相当を英語で講演することを依頼したが、英語専攻以外の学生にとっては語学が、経済・経営専攻以外の学生にとっては経済・経営の専門用語がネックとなり、講演者が学生の様子を見ながら内容や英語の分量を調整することとなった。
- 3 また、現代GPに採択直後にパイロットプログラムとして実施した講演会にも企業関連の講演が3つほど含まれている(全学英語教育運営委員会、2006)。
- 4 英語の授業ではあるが、最終レポートの言語を選択制にすることについてはコーディネーターの間で事前に協議した。結果的に、現代GPという公的な資金により可能となった授業のメリットを最大数の学生に還元するため、「Central Japan」は習熟度別のクラス編成は行わないことにし、全ての受講学生が学びを表現する機会を担保するために、成績評価に差を設けつつ英語または日本語を選択させることにした。

- 5 ただし、言語コミュニケーション学科の中には中国語専攻の学生も含まれるので、純粋な英語専攻の学生の割合は長久手キャンパスでは74%より低くなることが予想される。

資料1 授業シラバス

Central Japan 2008 年後期

星が丘キャンパス 25A 教室 木曜3限 (13:20—14:50)

担当者：太田晶子 (akikoo@asu.aasa.ac.jp)、McGoldrick Gemma (gemmamcg@asu.aasa.ac.jp)

福本明子 (afkmt@asu.aasa.ac.jp)

授業の目的：

- 1) 実社会における企業の役割、また厳しい現実などを理解し、より広い視野を育てること。
- 2) 授業内容を理解し、それを自分の言葉でまとめ、表現できるようになること。

授業計画：以下の日程で企業からスピーカーをお招きします。

授業日程	授業内容	レポート・アンケート提出	
		事前レポ	授業後アンケート
10月2日	授業オリエンテーション1	なし	なし
9日	授業オリエンテーション2	○	なし
16日	1：ラクオリア創薬株式会社	○	○
23日	2：(元)ブラザー工業株式会社	○	○
30日	3：太陽化学株式会社	○	○
11月6日	4：Harman/Becker Automotive Systems-Japan	○	○
13日	5：アイ・ティ・クリエイト株式会社	○	○
20日	6：生化学工業株式会社	○	○
27日	7：中部電力株式会社	○	○
12月4日	8：日経メディアマーケティング株式会社	○	○
11日	9：豊田通商株式会社	○	○
18日	10：アメイジア株式会社	○	○
25日	11：アストンマーティン名古屋	○	○
1月8日	(授業無し：月曜日の補講日)	○	○
15日	12：中京テレビ放送株式会社	○	○
22日	スケジュール調整日	授業に関するアンケート・最終レポート提出	

※スケジュールは変更の可能性があります。

※授業に関する掲示・連絡や資料配布に Blackboard (学習管理システム) を用います。学内・学外からアクセスできます。企業のウェブアドレス情報もあります。このクラスを受講する学生は、各自、必

10月9日(木)の授業迄に以下の手順で登録を行うこと。

Blackboard 登録手順

1. <http://lecbb.aasa.ac.jp/> へ行く。
2. 「ユーザーログイン」ボタンをクリックする。
3. 「ユーザー名」には学内 LAN アカウントを、「パスワード」にはパスワードを入力する。
4. 「ログイン」ボタンをクリックする。
5. 「コース」と名前のついたタブをクリックする。
6. 「コースの検索」の空欄に「Central 2008」と入力して「Go!」ボタンをクリックする。
7. 「Central Japan 2008 年度 秋学期」という科目名が見つかる (はず)。
8. 画面右端の「登録」ボタンをクリックする。登録画面に変わる。
9. アクセスコードにXXXXと入力し(頭文字は小文字で、スペース無し)、「送信」ボタンをクリック。
10. 登録が完了する。「OK」ボタンをクリックする。
11. (注意) 登録は、10月9日(木)の授業迄に行うこと！

評価基準

出席・参加 30%、事前レポート 30%、授業後のアンケート 10%、最終レポート(授業に関するアンケート含む) 30%

〈評価基準詳細〉

出席

講演者には、忙しいスケジュールを調整して・準備して、来ていただいています。皆さんの授業態度が愛知淑徳大学全体の印象に影響を与えるので、遅刻・私語・居眠りは厳禁です。これらの行動は減点の対象になります。また、実授業時間数の3分の1を超えて欠席したと授業担当者が認めた場合は、他の項目の評価に関らず、欠席過多で失格(単位不認定)とします。欠席により逃した情報や資料は、外国語教育センターのカウンター(3号館6階)又はBlackboardより各自入手すること。

参加

講演に対して質問することは、英語圏では講演者に対しての礼儀となっています。質問をする訓練や、自己表現の訓練として、質問を行うこと(行方姿勢)を成績評価の一部とします。手順としては、

- 1) 質問は授業中に考えて「質問カード」に記入する(英語で)。
- 2) 質疑応答の時間がとれたら、全員「質問カード」に記入していることを前提にして質問を募るか、担当者又は講演者がランダムに当てる。
- 3) 授業後、当たった人も当たらなかった人も、全員「質問カード」を提出してから退出する。

質問カードを出さない人、又は日本語で質問が書いてある場合は、参加点を減点します。がんばってください！

事前レポート

授業前に、各企業について各自が下調べをする課題です。講演予定の企業のウェブページや関連記事を検索して、Blackboard上の質問について調べ、回答をウェブ上で記載・提出します。一度しか提出できません。提出後の修正はできません。

授業後アンケート

毎回、企業の講演後1週間以内に、Blackboard上でアンケートに答えてもらいます。さらに、学んだ内容について記載をしてもらいます。回答してもらった内容は、講演を行っていただいた企業・講演者に参考資料として提出する場合がありますので、誤字脱字に気をつけ、表現や内容にも失礼のないように配慮してください。

最終レポート

受講した授業の中で、一番興味があった企業や学期を通じて学んだ内容を、日本語 1200 字以上または、英語 600 語以上にまとめて提出すること。講演の内容の繰り返しではなく、学んだこと・発展的に考えたことから、自らの感想や学びを中心に書くこと。印刷して提出してください。提出締切りは1月22日（木）16：00、提出先は星が丘キャンパスのレポートボックス（1号棟2階印刷室内）。授業に関するアンケートについても、Blackboard上で1月22日（木）16：00までに提出すること。レポートの注意点：レポートには、1）「最終レポート」の表記、2）学籍番号、3）氏名、4）担当者名を必ず記入すること。名前なし、提出先間違いは0点です。最終レポートを英語で書いた場合は、日本語で書いた場合よりも高く評価します。レポートの字数をツール機能の文字カウントで数えて、文末に（ ）に入れ記入すること。例：日本語（1230 字）または、英語（654 語）。英語の場合、アルファベットの数ではなく、単語数（＝語数）で表記すること。レポートが2枚以上になる場合は、ホチキスで必ずまとめて提出すること。

注意：

※ Blackboard 上でレポートなどを提出する場合は、「保存」ボタンでは、未提出扱いになります。必ず「送信」ボタンを押してください。

※ 事前レポート・授業後アンケートの提出は、指示された期日までに各自が Blackboard 上で行うこと。提出日に間に合わなくても、後日、必ず提出してください。最終締切りは、1月22日（木）16：00です。これ以降の提出は最終評価に反映されません。

※ 各レポートは、「必ず」自分の言葉でまとめること。不適切な引用や、資料の丸写しは0点です。引用する場合は「 」でくくり、出典を明記すること。